

『殉愛のしづく』

著：名倉和希

iii：御園えりい

「おまえはまだ帰らないのか」

「はい。もう少しだけ」

「そうか」

母親に乱された心は、その後の数時間でずいぶん凧(な)いでいた。むしゃくしゃした気分を女で晴らそうと『恋人』の一人に約束を取り付けたが、落ち着くにつれて部屋の隅でひっそりと仕事をしている朝日の存在が気になってきた。

今夜、清一郎がなにをしようとしているか察しているくせに、なにも言わない。日陰の女を気どっているのかと皮肉な見方をしようとしたが、朝日がそんなタイプではないことくらいそばにいればわかる。大阪での一夜の翌朝のように、きっと精一杯の自制心でもって平静を装っているに違いない。

「じゃあ……」

社長室を出ていく清一郎を、朝日はマニュアルどおりの丁寧なお辞儀で見送ってくれた。ただマニュアルと違っていたのは、瞳が濡れたように潤み、目尻が赤く染まっていたことだろう。体に沿うようにした手の先も、よく見れば小刻みに震えていた。

あの夜、清一郎は好奇心で朝日に手を出した。以前から好意があるようなセリフを吐いたが、本心ではないことくらい朝日もわかっていただろう。それでも許したのは、指摘したとおり、朝日は清一郎のことが好きだったからにほかならない。翌朝の朝日の泣き顔は、たびたび記憶の底からよみがえり、清一郎をいたたまれない気分させていた。

社長室を出てエレベーターに向かいながら、後ろ髪を引かれるとはこういうことかと、清一郎はもやもやとした気持ちを抱える。朝日は今夜、一人で泣くのだろうか――。

いやまさか、大人の男がこんなことくらいで。

だが朝日は実際に清一郎の前で泣いた。謝りながら、静かに涙をこぼしていた。

今夜もきっと、清一郎がホテルで女を抱いているのと同じ時間に、あの初心で純情な秘書は、貞操観念のない社長を恨みながらも捨てきれない想いを抱え、一人で寂しく泣くのだろう。

エレベーターが一階に到着した。広いエントランスホールの正面はガラス張りになっている。自動ドアのすぐ外に、黒塗りの車が待機しているのが見えた。清一郎を待っているのだ。

「……………」

自動ドアの前でいったん立ち止まり、清一郎はしばし目を閉じて自問自答した。

いま本当に女を抱きたいか、相手は彼女でいいのか、セックスすれば鬱憤は晴れるかもしれないが、それは朝日を悲しませて泣かせるほどのことなのか。

いやいや、朝日はただの秘書であって、『恋人』ですらない。他の女と寝たところで関係ないはずだ。大阪の夜は勢いで起こった単なるアクシデントであって、朝日とて一夜の過ちだと理解してくれているだろう。

だが——…………。

「ああ、くそっ」

苛々する。こんな気分では、セックスしても楽しくない。盛り上がれない。

清一郎は回れ右をしてエレベーターに戻った。朝日がどうしているか気になってたまらないので、顔を見てこよう。特に変わった様子がなければ、ホテルに向かおう。

エレベーターが社長室のフロアに停まり、清一郎は早足で廊下を歩いた。ノックもなしにいきなりドアを開ける。

「北原」

「しゃ、社長っ？」

驚きのあまりひっくり返った声を上げた朝日は、自分のデスクにいた。半泣きの顔で。

想像どおりの泣き顔に、清一郎はがっくりと肩を落とす。萎えかけていた女に会う気持ちだが、完全に萎えて、一気に消滅した。

「あの、社長、どうかなさったんですか？ 忘れ物ですか？」

涙をすすりながら朝日が立ち上がる。その頼りない細い体を、清一郎は衝動的に抱きしめていた。

「社長っ？」

腕の中で朝日がもぞもぞと身じろぐ。じっとしていろと命じると、ぴたりと動かなくなった。どこまでも従順な朝日に、なにか熱いものがぐっと込み上げてくる。それはまぎれもなく愛おしさであり、それにとמוなう欲情だった。

いま自分は、女ではなく朝日を抱きたいと、はっきりわかった。

「あの……待ち合わせの時間は……」

「もういい。今夜は会わない」

「会わないって……、どうしてですか」

それをおまえが聞くのかと、突っ込みたくなる。説明するのは面倒で、清一郎は命令だけ下した。

「おまえ、もう今日は終わりにしろ。どうせたいした用じゃないんだろう」

「えっ、でも……」

「ついてこい」

「えっ……私が、ですか……」

ぽかんと口を開けて見上げてくる朝日の様子に、拒絶される可能性をまったく考えていなかった清一郎はわずかにうろたえた。

「……嫌か？」

「い、いえ、そんなことは……。ただ、その、びっくりしてしまって……」

朝日はかわいそうなくらい動揺して、ますます涙目になっていく。泣くほど自分のことを好きなら、女と会うなど言ってくれればいいのにと、清一郎はあまりにも控えめすぎる朝日の性格に難くせをつけたくなった。

「ほら、帰り支度をしろ」

「は、はい」

あたふたとデスクまわりを整理しはじめた朝日を眺めながら、清一郎はどこに連れていこうかと考える。いつも利用しているホテルには今ごろ女が待っているだろう。もう帰れと連絡するのはマヌケだし、女が帰ったあとの部屋で朝日を抱くのは、いくらなんでもデリカシーがなさすぎる。

それに誰に見られるかわかったもんじゃない。秘書の朝日とシティーホテルに入ったからといって、即座に肉体関係を想像する者は少ないだろうが、できるなら人目を避けたかった。

「俺の家に来るか」

思いつきで口にしたが、それが一番の名案だと思えた。清一郎はこの本社から車で十五分ほどのマンションに一人暮らしをしている。

「社長の、ご自宅ですか……？」

泣いて腫れぼったくなっている瞼(まぶた)でぱちぱちと瞬きするさまがあどけなく見え、清一郎は意地悪してみたくなった。

「朝日……」

いきなり名前を呼んでみると、予想どおり、朝日がびくっと全身を震わせた。あの夜以外で、清一郎は名前を呼んだりしていない。社長室の空気が、がらりと変わった。強張っている朝日の肩に、清一郎は手を置いた。わざと意味深な動きで背中を撫で下ろし、臀(でん)部(ぶ)を掴む。

「ここ、もう痛くなくなっただろう？」

カーッと耳まで赤くなりながら、朝日がこくんと頷く。もともと切れてケガをしていたわけではなかったようで、三日もすると朝日の歩き方は元に戻っていた。

「朝日、家においで」

「…あ、あの……社長……」

あきらかな誘いだ。ただ遊びに行くだけではない。これは、二度目を誘っているのだと、清一郎は目で語った。

「会社を一步でも出たら、社長はナシだ」

内緒話のようにこっそり言うと、朝日は耳から首筋へと刷いたようにサッと朱色に染めた。

「あっ……」

がくりと膝を折り、朝日がデスクに手をついた。

「どうした？ 大丈夫か？」

「だ、大丈夫、です」

茹(ゆ)でダコのように真っ赤になった顔で項垂れ、朝日は唇を噛みしめている。

会うつもりだった女よりもずっと楽しい。清一郎はいつしか期待に胸を躍(おど)らせていた。

本文 p57～63 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>